祭礼行事が町家型市街地の通り沿い住空間に与える影響（その1）： 福井県坂井市三国湊地区における祭礼時の住空間の使われ方の実態と変容

IMPACT OF THE FESTIVAL ON LIVING SPACE ALONG THE STREET IN URBAN AREA CONSIST OF TOWNHOUSES (PART1): FEATURES AND TRANSFORMATION OF LIVING SPACE USAGES DURING THE FESTIVAL IN MIKUNI-MINATO DISTRICT, SAKAI CITY, FUKUI PREFECTURE

宗野 みなみ^{*1}, 永野 真義^{*2}, 中島 直人^{*3}, 宮城 俊作^{*4}

*Minami MUNENO, Masayoshi NAGANO, Naoto NAKAJIMA
and Shunsaku MIYAGI*

This paper aims to clarify how the living space of the townhouses is used during float festival, the characteristics of the space for watching it, and their transformations. Findings are as follows. First, the living space is open to the street, which has become more prominent at present. Hospitality has not changed, but the visitor type has been unified and fixed. Second, basically, the watching space faces the street. In addition, view of the street, daily use and floor finishing affect its selection. At present, a new watching space appeared with the change of living space.

Keywords : Local festival, Float festival, Mikuni festival, Watching space, Historical townscape, Townscape inheritance

地域祭礼, 曳山祭, 三国祭, 観賞空間, 歴史的町並み, 町並みの継承

1. はじめに

1.1 研究の背景

歴史的建造物の外観意匠を継承することによる町並み継承は、全国各地で成果を上げているが、特に町家が建ち並ぶ歴史的市街地（以降「町家型市街地^{注1)}」と表記する）において、その手法を適用することの限界が指摘されている^{注2)}。従って、建物内部を含めた住空間^{注3)}と町並みとの関係から、町並み継承の手法について再検討する必要がある。町家型市街地の空間的な特徴の一つに、通りと住空間が密接な関係を築いていることが挙げられる。町家が通りに面して建ち、大きな開口部を設けることで、通りと住空間が相互に関わり合っていた。しかし、時代が下るにつれ、その関係は希薄化している。

住空間と町並みとを関係付ける代表的な媒体として、通りで行われる祭礼行事が挙げられる。祭礼行事を見るという行為が住空間のあり方に影響を及ぼし、特徴的な町並みを生み出していることが既往研究で指摘されている。特に曳山祭においては、曳山巡行路沿いの住宅が建て替えられる際に居住者が住宅内部から曳山を見物することを意識して、建物を通りに面して建築したケースや、通りに面して大きな開口部を設けたケースがあることが報告されている^{注4)}。

通りで行われる祭礼行事をきっかけとして、通りと住空間が密接に関わり合う、町家型市街地の町並みを継承できるのではないかと。

1.2 既往研究の整理と本研究の位置付け

祭礼行事と都市や町並み、建築の関係性について論じた研究には蓄積が多く、特に、桂ら⁴⁾の「都市における祭礼空間の研究」と題し、熊本県内の祭礼行事について拠点等の分布を広域的な視点から分析した研究、松浦ら⁵⁾の「都市空間に演出される祝祭空間の都市形態学的解説」と題し、全国各地の曳山祭について祭礼時の通りや広場における曳山・曳き手・観客等の動きを分析した研究、増井ら⁶⁾の京都の祇園祭とそこから派生した全国各地の曳山祭について、祭礼時の町家や街路の利用状況、それらの町家や街路空間の形態への影響を分析した研究が充実している。特に増井らの研究には本研究と視座に近いものが多い。

本研究は、祭礼時の不特定多数^{注5)}の建物自体の使われ方と使われる空間のあり方^{注6)}について、建築スケールで分析を行うものである。この条件に当てはまる既往研究を整理する。祭礼行事を見るという行為が住空間へ与える影響を扱った既往研究としては、滋賀県蒲生郡日野町と日野祭を対象とした研究が充実している。祭礼時の家具

^{*1} パシフィックコンサルタンツ(株) 修士（工学）
（元東京大学大学院工学系研究科大学院生）

^{*2} 東京大学大学院工学系研究科 助教・修士（工学）

^{*3} 東京大学大学院工学系研究科 准教授・博士（工学）

^{*4} 東京大学大学院工学系研究科 教授・博士（農学）

Pacific Consultants Co., Ltd., M.Eng. (Former Grad. Stud., Graduate School of Engineering, Univ. of Tokyo)

Assist. Prof., Graduate School of Engineering, Univ. of Tokyo, M.Eng.

Assoc. Prof., Graduate School of Engineering, Univ. of Tokyo, Dr.Eng.

Prof., Graduate School of Engineering, Univ. of Tokyo, Dr.Agr.

等の配置や居住者の行動の実態について分析したもの⁷⁾、棧敷窓と呼ばれる住宅の塀に設けられる祭礼を見物するための装置に着目し、塀の形態や祭礼時の建具等の操作について分析したもの^{8)~12)}、それらについて過去の調査結果との比較によりその変化を分析したもの¹³⁾、住宅更新時の居住者の意識が塀の形態に与える影響について分析したもの^{14)~19)}がある。その他に、滋賀県大津市と大津祭を対象とし、住宅更新時の居住者の意識に着目して、建て替え前後における曳山を見物する場所の特徴や屏風飾りの様子の変化を個別事例について詳細に分析した研究^{3),20),21)}、長野県岡谷市・下諏訪町・諏訪市上諏訪と御柱祭を対象として、祭礼時に訪問者に対するおもてなしの行動がとられる場所の実態を分析した研究²²⁾がある。なお、これらの研究の対象地のうち、滋賀県大津市は町家型市街地であるが、滋賀県日野町と長野県岡谷市・下諏訪町・諏訪市上諏訪は通りから後退して主屋を建てる非町家型の市街地である。

以上より、既往研究は、非町家型の市街地での調査が主で町家型市街地での実証的な研究が乏しいこと、居住者の意識にまで踏み込んだ研究はあるものの、個別建物単位の分析にとどまっており、集合としての町並みに影響を与える全体的な傾向を見出せていないこと、祭礼のあり方の変化、居住者の行動や意識の変化を織り込んで検討したものが少ないことなど、さらに検討すべき課題が多く残されている。そこで本研究では、建物内部の住空間との関係から町並みの継承のあり方を考えるための基礎的な知見を得るために、町家型市街地の住空間と祭礼行事の關係に着目し、その全体的な傾向を、祭礼行事のあり方、居住者の行動や意識の変化を踏まえて検討することとする。

1.3 対象地とその位置付け

対象とする祭礼行事の選定条件は、既往研究を参考として曳山祭であること^{注7)}、巡行ルートが市街地周遊型であること^{注8)}、住空間で祭礼行事を楽しむ習慣があるものであること^{注9)}の3点とする。また、対象とする地区の選定条件は、町家型市街地であること、曳山巡行路の道路幅員が小さいこと^{注10)}、伝建地区に指定されていないこと^{注11)}の3点とする。岩間ら²⁴⁾がまとめた「祭礼百選」に選定された100件の祭礼行事と地区の中で^{注12)}、上記6つの条件を満たすものは9件^{注13)}であり、この中で、幅員の狭いルートが連続する福井県坂井市の三国湊地区と三国祭を本研究の対象とする。

1.4 研究の目的

本研究は、福井県坂井市三国湊地区の町並みを構成する町家のうち曳山巡行路沿いのものを対象として、曳山祭開催時の町家の住空間の使われ方の実態、曳山を観賞する空間の特徴とそれらの変容を、2.5で詳述する文献調査により現在の曳山の観賞方法の定着以前と考えられる期間の中で、文献²⁵⁾に住宅の実測図等研究に必要な素材が充実している、1980年頃と現在との比較によって明らかにすることを目的とする。

1.5 研究の構成

2章では、対象地の住宅様式の変遷と対象とする祭礼行事の歴史を概観し、1980年時点が現在の曳山の観賞方法が定着する以前であることを確認する。3章で、建具等の操作や訪問客に対するおもてなしを中心とした祭礼時の住空間の使われ方を、4章では、住空間の一部を使った曳山の観賞空間の特徴を、ともに1980年時点と現在との2時点間の変化に着目し、全体的な傾向について分析を行う。

以上の結果を5章の結論でまとめる。

1.6 調査の方法

a) 文献調査(2章)

b) 住宅所有者に対するアンケート調査(3章・4章)

2020年7月に曳山巡行路沿いの住宅60軒に対してアンケートを直接配布し、49軒から直接または郵送により回収した(回収率は82%)。アンケートは住宅1軒に対して、1980年時点の状況を尋ねるものと、2019年時点の状況を尋ねるものの、計2種類を配布し、前者については、当時の状況を把握している人がアンケート配布時に居住している場合にのみ回答してもらった。したがって、2019年時点の状況を尋ねるアンケートの回答数は49件であるのに対して、1980年時点の状況を尋ねるアンケートの回答数は37件となった。配布先は、文献²⁶⁾に平面実測図と外観写真が記録されている住宅、またはそれが建て替えられた後の住宅に加えて、アンケートに協力的であると自治会長が判断した住宅所有者とした。項目は、曳山を見る場所、祭礼時の建具や家具の状態、祭礼時の居住者と訪問者の様子である。

c) 住宅所有者に対する各住宅についての聞き取り調査(3章・4章)

b)のアンケートを回収する際に承諾を得られた住宅所有者に対して聞き取り調査を行い、アンケートの回答内容について補足をしてもらった。

d) 住宅の平面図または間取り図の調査(4章)

b)のアンケートを配布する際に、文献²⁶⁾に掲載されている住宅については、平面実測図のコピーを居住者に渡して、曳山を見る場所を書き入れてもらいアンケート用紙とともに回収した。文献²⁶⁾に掲載されていない住宅については、可能な範囲で平面図のコピーを用意してもらいか手描きの間取り図を作成してもらい、同様に曳山を見る場所を書き込んでもらい、アンケート用紙とともに回収した。2019年時点の住宅の平面図または間取り図は18件、1980年時点の住宅の平面図または間取り図は15件入手した。

e) アンケート調査対象住宅の外観写真の調査(4章)

1980年時点のアンケート配布住宅の外観写真は文献²⁶⁾に掲載されているものと、住宅所有者から提供されたものを利用した。2019年時点の住宅の外観写真は2020年7月に筆者が撮影した^{注14)}。2019年時点の外観写真は49件、1980年時点の外観写真は13件入手した。

2. 対象地について

2.1 対象地の概要

対象地である福井県坂井市三国湊地区(旧三国町)は、嶺北地方の代表的な河川である九頭竜川が竹田川と合流し、日本海に流れ込む河口に位置する(Fig.1)。中世・近世に発展した湊町であり、特に17世紀後半以降、三国湊は北前船の有数の寄港地として繁栄を極めたが、北陸本線の開通により商港としての役割を失い、現在は漁港となっている。

2.2 対象とする祭礼行事の概要と歴史

三国祭は三国神社の例大祭であり、毎年5月19日から21日に行われる。その中日に、当該年に当番となった区^{注15)}が神社に奉納する曳き山車^{注16)}が地区内をゆっくりと巡行する。巡行路沿いの住宅で食事や酒等を用意して客をもてなし、住空間から曳き山車を

Fig.1 Location of Mikuni-minato district (国土地理院基盤地図より筆者作成)

見物することが習慣となっている。曳き山車は上下2段で人形を含めた全体の高さは約5~6.5mである。上段は毎年作り替える大きな人形を飾る場所、下段は囃子方の乗る場所である。人形は歴史的な人物等をモチーフにした武者人形であり、人形師によって制作されるものと区民により制作されるものがある。三国祭の曳き山車は路地を含めて地区全体をゆっくりと練り歩く。

三国祭の歴史¹⁷⁾は江戸時代中期に遡る。武者人形の起源は1753年にあり、18世紀の終わり頃には人形を飾ることが定着した。以降人形は巨大化し車屋台に大きな人形が載るという現在の姿になっていった。曳き山車の高さは明治中期には10m以上あったと言われるが、1909年から1915年に架設された電線による高さの制限を受けて小さくなった。戦争の影響により1941年から曳き山車の巡行がとりやめられたが1947年に復活した。2020年に新型コロナウイルス感染拡大の影響により戦後初めて曳き山車巡行が中止となった。

2.3 対象地における住宅様式の変遷¹⁸⁾

対象地の町家の平面形式の代表的なものは、奥行き長い敷地の街路側に主屋を置き、中庭を挟んで土蔵を数棟川沿いまで並べ、主屋の片側に通り庭を通す通り庭一列型である。正面2階の軒高は19世紀はじめに建てられたものでは10尺程度だが徐々に高くなり、幕末・明治初期に14尺を超え、明治末から大正期には18尺程度となる。正面軒高が高くなるということは2階の天井高が高くなるということであり、これに伴い2階の使われ方が変化する。古くはつし2階であったものが時代が下るにつれ居室として使われるようになり、幕末期には建築当初から2階を居室とするようになる。2階正面の窓は軒高が低い場合は無いかあっても簡易的なものであるが、2階が居室化すると内側には障子の引き違い戸を入れて、外側には格子を入れるようになった。

2.4 対象地において実施された町家と町並みの調査

三国町郷土資料館（現みくに龍翔館）に展示する蔵並模型を作成するため、三国湊地区と周辺の民家の大規模な調査が1979年から1981年に実施された。調査結果を基に、三国湊地区の形成過程と、町家の間取りや外観意匠、屋根形状の変遷について詳細に分析がされている¹⁹⁾。さらに、三国湊地区内の40軒の民家が実測され、平面実測図・断面実測図が外観写真とともに記録されている²⁰⁾。本

研究ではこの調査結果を活用し、調査と分析を行った。

2.5 対象地における曳き山車の見方の変遷と1980年の位置付け

明治期以降に撮影された三国祭開催時の写真²¹⁾から、曳き山車の見方を分析した。明治後期から現在まで、住宅の軒先から見物している様子を共通して確認できた。住宅内部の様子を伺える資料が少なかった²²⁾が、2008年以降の写真では全て、住宅の2階から曳き山車を見物する様子が確認できたことから、この時期にはこの見方が定着していたと考えられる。加えて、曳き山車の高さと住宅の高さの関係が大きく変化してきたことがわかった。明治後期までは曳き山車の高さが沿道の建物よりもはるかに高かった（Photo 1）が、大正期以降にはそれが明治期の半分程度となっている（Photo 2）²³⁾。一方、住宅の高さは平成以降、それよりも前の時期に比べて高くなっていることが確認できる。曳き山車の高さと住宅の高さがそれぞれ変化することによって両者の高さの関係が変化し、曳き山車の見物の仕方に影響を与えたことが予想される。

Photo 1 Float parade in 1905
(三国湊地区居住者提供)

Photo 2 Float parade in 1935
(三国湊地区居住者提供)

三国祭開催時の写真の調査結果と、2.2、2.3で整理した曳き山車の高さの変遷、住宅の軒高と階数の変遷をFig.2に整理した。明治期には曳き山車の高さが10m以上であったのに対して住宅の軒高は4m前後であった。両者の高さの関係より、住宅の内部から曳き山車の武者人形を見物することが困難であったために、軒先から

Fig. 2 Changes in how to watch the float and positioning in 1980

見物することが基本であったと考えられる。大正期には電線架設の影響で曳き山車の高さが現在と同じ 5m 前後まで低くなり、対して住宅の軒高は 6m 前後まで高くなった。両者の高さの関係上は、住宅の内部の 1 階と 2 階の両方から曳き山車を見物することが可能になった。ただし、2008 年より前の三国祭開催時の写真においては、住宅の 2 階から曳き山車を見物する様子は確認できておらず、2 階から見物することが定着した時期については建物内部を含めた調査が必要である。

以上より、2 階から曳き山車を見ることが既に定着していたと考えられる 2008 年より前の時期で、文献²⁵⁾に住宅の平面実測図と外観写真が記録されており、かつ当時の様子を記憶している人が多いと考えられる、1980 年時点と現在との比較対象として設定すること

とする。

3. 祭礼時の住空間の使われ方の実態と変容

住宅所有者に対するアンケート調査により、祭礼時の住空間の使われ方を、建具や家具の状態、居住者と訪問者の様子に着目して明らかにする。その際、1980 年時点の状況と 2019 年時点の状況を比較することで、その変容について分析を行う。なお、Table2~Table10 に各選択肢の回答数と割合を示しているが、割合を算出する際の母数は、無回答の件数を除いたものとしている。

3.1 祭礼時の建具、開口部や家具の状態

祭礼時のふすまや障子の状態を Table1 に、ガラス窓の状態を Table2 に、玄関ドアの状態を Table3 に、家具等の状態を Table4 に

示す。ふすまや障子は2時点ともにレールの左右に寄せているか、取り外している住宅が多い。ガラス窓は2時点ともにほとんどの住宅でレールの左右に寄せているが、2019年にはサッシごと取り外している住宅が登場している。玄関ドアは2時点ともに開け放している住宅の方が閉めている住宅よりも多い。家具の状態については、2時点ともに座布団を敷いている住宅、テーブルを移動させている住宅が多い。

以上より、2時点ともに、建具や開口部の操作により祭礼時は平常時よりも住空間が通りに対して開かれた状態となっていることが明らかになった。さらに、2019年には祭礼時にガラス窓を取り外す住宅が登場し、通りに対して開かれた状態がより顕著になっている。家具等については、2時点ともに平常時と異なる配置となっていることがわかった。しかし、全体としては1980年と2019年との間に大きな変化は見られない。

Table 1 Condition of sliding doors

Choices/Target year	N= (%)	
	1980	2019
①取り外している Removing them	10 (33.3)	15 (37.5)
②レールの左右に寄せている Bringing them to the end of the rail	15 (50.0)	21 (52.5)
③閉めている Closing them	2 (6.7)	4 (10.0)
④その他 Other	3 (10.0)	0 (0)
回答数 Number of responses	30	40

Table 2 Condition of window glass

Choices/Target year	N= (%)	
	1980	2019
①取り外している Removing them	0 (0)	3 (7.7)
②レールの左右に寄せている Bringing them to the end of the rail	23 (76.7)	29 (74.4)
③閉めている Closing them	5 (16.7)	6 (15.4)
④その他 Other	2 (6.7)	1 (2.6)
回答数 Number of responses	30	39

Table 3 Condition of a front door

Choices/Target year	N= (%)	
	1980	2019
①開け放している Opening it	22 (68.9)	27 (6.8)
②閉めている Closing it	9 (28.1)	16 (65.9)
③その他 Other	1 (3.1)	1 (13.6)
回答数 Number of responses	32	44

Table 4 Condition of furniture

Choices/Target year	N= (%)	
	1980	2019
①テーブルを移動させる Moving a table	10 (32.3)	15 (39.5)
②椅子を移動させる Moving chairs	2 (6.5)	5 (13.2)
③座布団を敷く Laying cushions	17 (54.8)	28 (73.7)
④畳を敷く Laying tatami mats	1 (3.2)	0 (0)
⑤その他 Other	8 (25.8)	6 (15.8)
回答数 Number of responses	37	49

※複数回答可 multiple answers allowed

3.2 祭礼時の居住者と訪問者の様子

祭礼時の居住者の在宅状況を Table5 に、訪問者の受け入れ状況を Table6 に、訪問者の属性を Table7 に、訪問者の人数を Table8 に、訪問者への飲食の提供状況を Table9 に示す。2時点ともに居住者全員が在宅している住宅が多いが、2019年の方が居住者全員が在宅していると回答した住宅の割合が小さく、会社勤務をしていない人が家にいる（会社勤務をしている人が家にいない）と回答した住宅の割合が大きい。2時点ともにほとんどの住宅で訪問者を受け入れており、親戚と友人を招いている住宅、親戚のみ招いている住宅の順に多いが、2019年の方が親戚と友人を招く住宅の割合が小さく、親戚のみ招く住宅の割合が大きい。訪問者の人数について平均値を出すと、1度に入る最大の人数は2時点で変化していないが、1日の延べ人数は2019年の方が少ない。この結果は、親戚のみ招

く住宅が増えたことにより、1人の訪問者が複数の住宅を渡り歩くことが減ったことに起因すると考えられる。2時点ともにほとんどの住宅で訪問者に対して食べ物を提供しており、手料理を振る舞う割合は変化していない。

以上より、2時点ともに祭礼時には平常時よりも多くの人が住空間に滞在していること、しかし2019年の方が会社勤務をしている人が在宅することが減っていること、2時点ともにほとんどの住宅で訪問者をもてなしており、もてなしの形も変化していないが2019年の方が訪問者の属性が単一化・固定化していることがわかった。

Table 5 Residents at home

Choices/Target year	N= (%)	
	1980	2019
①居住者全員が家にいる All residents were at home.	24 (70.6)	27 (64.2)
②会社勤務をしていない人が家にいる Residents who are not working at the company were at home	8 (23.5)	15 (35.7)
③その他 Other	2 (5.9)	0 (0)
回答数 Number of responses	34	42

Table 6 Whether to accept visitors

Choices/Target year	N= (%)	
	1980	2019
①受け入れている Accepting visitors	32 (86.5)	43 (91.5)
②受け入れていない Not accepting visitors	5 (13.5)	4 (8.5)
回答数 Number of responses	37	47

Table 7 Visitor type

Choices/Target year	N= (%)	
	1980	2019
①居住者の親戚のみ Relatives	11 (34.4)	17 (41.5)
②居住者の友人のみ Friends	0 (0)	1 (2.4)
③居住者の親戚と友人 Relatives and friends	20 (62.5)	22 (53.7)
④その他 Other	3 (9.4)	3 (7.3)
回答数 Number of responses	32	41

※複数回答可(④とそれ以外の組合せに限る)
multiple answers allowed, limited to combinations of "④" and other options

Table 8 Number of visitors

Target year	1980	2019
1度に入る最大の人数(人) Maximum number of visitors	12.8	12.8
1日の延べ人数(人) Total number of visitors	17.5	14.7
回答数 Number of responses	23	33

Table 9 Whether to provide food and drink to visitors

Choices/Target year	N= (%)	
	1980	2019
①食べ物も飲み物も提供しなかった Serving nothing	0 (0)	1 (2.3)
②飲み物のみ提供した Serving drink, not food	0 (0)	0 (0)
③購入した食べ物のみ提供した Serving purchased food	9 (30.0)	11 (25.6)
④手料理のみ提供した Serving homemade food	6 (20.0)	9 (20.9)
⑤購入した食べ物と手料理を提供した Serving purchased food and homemade food	15 (50.0)	22 (51.2)
⑥その他 Other	0 (0)	0 (0)
回答数 Number of responses	30	43

Fig. 3 Case studies of “watching space” : where to watch floats

4. 曳き山車を見る空間の特徴の実態と変容

まず、住宅所有者に対するアンケート調査より、曳き山車を見る空間（以降「観賞空間」と表記する）を把握する。次に、住宅の平面図または間取り図の調査より、各時点における住空間の特徴と、住空間全体における観賞空間の位置を把握する。その上で、図面に記載された情報や、住宅所有者に対する聞き取り調査と住宅の外観写真から得られた情報をもとに、その空間が観賞空間として選ばれた要因を考察し、観賞空間の特徴を明らかにする。なお、主な観賞空間の事例を Fig.3 に示す。

4.1 曳き山車を見る空間の概要

住宅所有者に対するアンケート調査の結果より、観賞空間の位置を Table10 に示す (Fig.4 は各観賞空間の住空間における位置を示している)。なお、各選択肢の回答数と割合を示しているが、割合を算出する際の母数は、無回答の件数を除いたものとしている。1980年時点では1階の部屋、2階の部屋、軒先が主要な観賞空間であったが、2019年時点ではこれら3つの場所に加えてテラス・ベランダと駐車スペースが主要な観賞空間となっており、観賞空間は多様化し

Fig. 4 Watching space

Table 10 Watching space

Choices/Target year	N = (%)	
	1980	2019
① 1階の部屋 Room on the 1st floor	12 (35.3)	16 (36.4)
② 2階の部屋 Room on the 2nd floor	18 (52.9)	18 (40.9)
③ 駐車スペース Parking lot	0 (0)	9 (20.5)
④ テラス・ベランダ Terrace and balcony	1 (2.9)	13 (29.5)
⑤ 軒下 Under the eaves	10 (29.4)	10 (22.7)
その他 Other	2 (5.9)	4 (9.1)
回答数 Number of answers	34	44

※複数回答可 Multiple answers allowed

たと言える。また、2.4の文献調査において2008年より前の写真では2階の部屋から観賞する様子は確認できなかったが、1980年時点で既に2階の部屋は主要な観賞空間となっていたことが明らかになった。

4.2 曳き山車を見る空間の特徴とその変容

住宅の平面図または間取り図を入手できた住宅について、1980年時点と2019年時点の住空間の特徴の比較を行い、Table11に示した。1980年時点では全ての調査対象住宅が2階建てであり、通りに面して駐車スペースや、テラス・ベランダを設けている住宅はなかった。他方、2019年時点では、2階建ての住宅が多いものの、新たに3階建ての住宅が登場し、通りに面して駐車スペースやテラス・ベランダを設けている住宅が、それぞれ半数程度を占めている。

Table 11 Housing features

住宅の特徴 Housing features		階数 Number of floors			通りに面した駐車スペース Parking lot facing the street			通りに面したテラス・ベランダ Terrace and balcony facing the street	
		1階建 1 story	2階建 2 story	3階建 3 story	屋外駐車スペース Outside parking	車庫 Garage	無し Without	有り With	無し Without
Target year	1980 N=	0	15	0	0	0	15	0	15
	2019 N=	0	14	4	6	3	9	8	10

続いて、住宅の平面図または間取り図の調査により明らかになった、曳き山車巡行路（以降「通り」と表記する）、主屋全体、観賞空間の位置関係を類型化し、各類型に当てはまる住宅の数²⁴⁾を Fig.5 に示す。

1階の部屋が観賞空間である住宅は、(①-A)～(①-D)の4つに分類できる。(①-A)と(①-B)は通りに面して主屋が建つ住宅であり、(①-A)は通りに面した部屋が観賞空間となっている類型、(①-B)は通りに面した部屋の奥の部屋が観賞空間となっている類型である。(①-

観賞空間 Watching space		① 1階の部屋 Room on the 1st floor				② 2階の部屋 Room on the 2nd floor		③ 駐車スペース Parking lot		④ テラス・ベランダ Terrace and balcony			⑤ 軒下 Under the eaves
観賞空間の類型 Type of watching space		①-A	①-B	①-C	①-D	②-A	②-B	③-A	③-B	④-A	④-B	④-C	⑤-A
Target year	1980	N=	2	1	0	1	6	1	0	0	0	0	8
	2019	N=	1	1	3	0	3	0	3	2	1	3	3

Fig. 5 Type of watching space

観賞空間 Watching space		① 1階の部屋 Room on the 1st floor				② 2階の部屋 Room on the 2nd floor	
観賞空間の類型 Type of watching space		①-A- i	①-A- ii	①-B- i	①-B- ii	②-A- i	②-A- ii
Target year	1980	N=	1	1	0	1	3
	2019	N=	1	0	0	1	2

Fig.6 Detailed type of watching space

C)と(①-D)は主屋が通りから後退して建てられている住宅であり、(①-C)は通り側の部屋が観賞空間となっている類型、(①-D)は通り側の部屋の奥の部屋が観賞空間となっている類型である。通りに最も近い部屋が観賞空間となる類型(①-A,①-C)の件数が2時点合わせて6件と多いが、そうでない類型(①-B,①-D)も2時点合わせて3件確認される。また、主屋が通りから後退している場合(①-C,①-D)にも1階の部屋から曳き山車を観賞していることがわかる。続いて、(①-B)と(①-D)の類型において通りに最も近い部屋が観賞空間とならなかった理由を、それぞれに分類された住宅の事例から考察する。(①-B)に分類された住宅のうち、1980年時点のものは店舗併用住宅であり、間取り図の情報によれば通りに面した空間が店舗であるため、そこを避けて奥の座敷が観賞空間となったと考えられる。2019年時点のものは専用住宅であるが、間取り図の情報によれば通りに面した空間が倉庫であるため、そこを避けて奥の座敷が観賞空間となったと考えられる。(①-D)に分類された住宅で、通りに最も近い部屋が観賞空間とならなかった理由は不明である^{注25)}。

2階の部屋が観賞空間である住宅は、(②-A)と(②-B)の2つに分類できる。(②-A)は通りに面して主屋が建つ住宅の、通りに面した部屋が観賞空間となっている類型、(②-B)は主屋が通りから後退して建てられている住宅の、通り側の部屋の奥の部屋が観賞空間となっている類型である。(②-B)の類型に分類された住宅において通りに最も近い部屋が観賞空間とならなかった理由は不明である^{注25)}。2階の部屋が観賞空間となっている住宅の大部分は(②-A)の類型であり、主屋が通りに面して建てられた住宅の方が2階の部屋が観賞空間となりやすいこと、2階では通りに最も近い部屋が観賞空間となりやすいことが考察できる。

駐車スペースが観賞空間である住宅は、(③-A)と(③-B)の2つに分類できる。(③-A)は主屋を通りから後退させて設けた屋外駐車スペースが観賞空間となっている類型である。(③-B)は通りに面して建てた主屋の1階に設けられた車庫が観賞空間となっている類型であ

る。なお、(③-A)と(③-B)はともに2019年のみで確認された。

テラス・ベランダが観賞空間である住宅は、(④-A)～(④-C)の3つに分類できる。(④-A)は主屋が通りから後退して建てられている住宅の1階に設けられたテラスが観賞空間となっている類型、(④-B)は通りに面して主屋が建つ住宅の通りに面したベランダが観賞空間となっている類型、(④-C)は主屋が通りから後退して建てられている住宅の通り側のベランダが観賞空間となっている類型である。テラス・ベランダが観賞空間となっている類型のうち、主屋が通りから後退している住宅(④-A,④-C)と、主屋が通りに面して建っている住宅(④-B)の件数は同数であるため、テラスやベランダの観賞空間への選ばれやすさは、主屋の通りからの後退の有無によらないことが考察できる。なお、(④-A)～(④-C)は全て、2019年のみで確認された。

軒下が観賞空間である住宅は全て、主屋が通りに面して建てられている住宅であり、(⑤-A)の1つの類型となる。1980年の方が2019年よりも、(⑤-A)の件数が多い。

1階の部屋、2階の部屋が観賞空間である類型の中で、(①-A)、(①-B)、(②-A)では、間口方向の左右どちらかまたは中央部のみが観賞空間となっているケースが多く確認された。その要因を考察するために、これらの類型を、観賞空間の間口方向における位置関係を考慮して細分化し^{注26)}、各類型に当てはまる住宅の数を Fig.6 に示す。(①-A- ii)は、通りと観賞空間との位置関係は(①-A- i)と同様であるが、間口方向の一部のみが観賞空間となっている類型である。一部のみが観賞空間となった理由を、(①-A- ii)に分類された住宅の事例から考察する。これに分類された住宅は店舗併用住宅であり、観賞空間は店舗である。図面の情報によれば店舗の中央に通路、左右に作業場がある。住宅所有者に対する聞き取り調査によれば、この通路部分に観光客が入り込み、曳き山車を観賞していたということである。つまり、この住宅では、店舗の空間構成が間口方向の一部のみが観賞空間となった要因である。(①-B)に分類された住宅は

全て、間口方向の片側のみが観賞空間となっている類型(①・B・ii)である。片側のみが観賞空間となった理由を、(①・B・ii)に分類された住宅の事例から考察する。この類型に分類された住宅のうち 1980 年時点の 1 件は、住宅所有者への聞き取り調査によれば、片側が居間でありもう一方が家族の個人室である。このうち居間が観賞空間となった。また、居間は二間続きの座敷であり、個人室は 1 部屋でその奥が中庭となっている。聞き取り調査より、部屋ごとに訪問客のグループを分けていたことがわかっているため、二間続きで必要に応じて部屋の仕切りを開閉できることが、観賞空間の選定理由の一つとなっていたと考えられる。2019 年時点の 1 件は、間取り図の情報によれば、通りに面した空間の片側が畳敷きの部屋で、もう一方が板張りの部屋である。このうち畳敷きの部屋のみが観賞空間となっている。(②・A・ii)は、通りと観賞空間との位置関係は(②・A・i)と同様であるが、間口方向の片側のみが観賞空間となっている類型である。片側のみが観賞空間となった理由を、(②・A・ii)に分類された住宅の事例から考察する。これに分類された住宅のうち 1980 年の 2 件は店舗併用住宅であり、外観写真によれば 2 階の開口部に重なる位置に大きな看板が取り付けられている。観賞空間はこの看板を避ける位置となっており、住宅所有者への聞き取り調査からも、看板を避けるようにして曳き山車を観賞していたことがわかった。なお、2 階開口部に重なる位置に看板が設置されているのは、外観写真によれば 1980 年時点の住宅のみであり、2019 年の方が 2 階から曳き山車を見物しやすい条件にあると言える。1980 年の残り 1 件では、聞き取り調査の結果によれば、片側が居間、もう一方が仏間である。仏間が観賞空間として避けられた可能性はあるが、片側のみが観賞空間となった理由は定かではない。2019 年の 2 件は、ともに片側が畳敷きの部屋、もう一方が板張りの部屋であり、畳敷きの座敷が観賞空間となっている。加えて、1 件について、図面の情報によれば、畳敷きの部屋は居間、板張りの部屋は居住者の個人室であり、居間が観賞空間となった。

観賞空間の特徴とその変容についてまとめる。まず、1980 年時点では 1 階の部屋、2 階の部屋、軒先が主要な観賞空間であったが、2019 年時点ではこれら 3 つの場所に加えてテラス・ベランダと駐車スペースが主要な観賞空間となり、観賞空間は多様化した。また、1980 年時点で既に 2 階の部屋は主要な観賞空間となっていたことが明らかになった。

通り、主屋全体、観賞空間の位置関係を類型化したところ 12 の類型が確認された。1 階の部屋、2 階の部屋が観賞空間である類型においては、通りに最も近い部屋が観賞空間となる類型が多いが、通りに最も近い部屋の奥の部屋が観賞空間となっている類型も確認された。また、間口方向の一部のみが観賞空間となっているケースが確認された。これらの要因の分析により、観賞空間の選定には、店舗空間の構成や部屋の床仕上げ、部屋の日常的な用途、通りへの見通しの良し悪しが影響していることが明らかになった。2019 年にのみ確認された住空間の特徴として 3 階に部屋を持つことが挙げられるが、2019 年時点で 3 階の部屋から見物する住宅は無く、3 階の部屋は観賞空間として定着していないことがわかった。駐車スペース、テラス・ベランダ、軒下が観賞空間である類型では、各空間の形状によって観賞空間の形状が決まっている。このうち駐車スペース、テラス・ベランダが観賞空間である類型は 2019 年にのみ確認

された新しい類型である。通りに面して駐車スペースやテラス・ベランダを設けている住宅は 2019 年にのみ確認されたため、これは住空間の変化に伴い登場した類型であると言える。軒下が観賞空間であるのは主屋が通りに面して建つ類型のみであり、この類型は 1980 年の住宅に多い。

5. まとめ

5. 1 曳山祭開催時の町家の住空間の使われ方の実態と変容

住宅所有者に対するアンケート調査により、祭礼時の住空間の使われ方の実態と変容を分析した。祭礼時には建具の操作により平常時よりも住空間が通りに対して開かれた状態となっていること、2019 年には開かれた状態がより顕著になっていることがわかった。合わせて、祭礼時には家具等が移動され、平常時とは異なる配置になっており、これについては 2 時点間に大きな変化はないことがわかった。そして、2 時点ともに祭礼時には平常時よりも多くの人が住空間に滞在しているが、2019 年の方が在宅する居住者が少ない傾向にあること、2 時点ともにほとんどの住宅で訪問者をもてなしており、もてなしの形も変化していないが、2019 年の方が訪問者の属性が単一化・固定化していることがわかった。

5. 2 住空間における曳山を見る空間の特徴の実態と変容

まず、住宅所有者に対するアンケート調査により観賞空間を概観したところ、1980 年から 2019 年にかけて、観賞空間が多様化したことが明らかになった。また、1980 年時点で既に 2 階の部屋は主要な観賞空間となっていたことが明らかになった。

次に、住宅の間取り図または平面図の調査により、通り、主屋全体、観賞空間の位置関係を類型化したところ 12 の類型が確認された。さらに、住宅所有者に対する聞き取り調査の結果と、住宅の外観写真の調査結果より観賞空間の選定要因を分析した。観賞空間の選定には、店舗空間の構成や部屋の床仕上げ、部屋の日常的な用途、通りへの見通しの良し悪しが影響していることが明らかになった。軒下が観賞空間である類型は 1980 年の住宅に多く、駐車スペースやテラス・ベランダが観賞空間である類型は 2019 年にのみ確認された。通りに面して駐車スペースやテラス・ベランダを設けている住宅は 2019 年にのみ確認されたため、これは住空間の変化に伴い登場した類型であると言える。他に、2019 年にのみ確認された住空間の特徴として 3 階に部屋を持つことが挙げられるが、2019 年時点で 3 階の部屋から見物する住宅は無く、3 階の部屋は観賞空間として定着していないことがわかった。

5. 3 曳山祭開催時の住空間の使われ方と観賞空間の特徴の関係

祭礼時の住空間の使われ方の分析より、祭礼時には平常時よりも通りに対して住空間が開かれており、2019 年にはそれがより顕著になったことがわかった。また、観賞空間の特徴の分析においては、2019 年にテラス・ベランダから曳き山車を見物する新しい類型が登場したことが明らかになった。これらを合わせると、1980 年よりも 2019 年の方が、より間近で、通りの空気感を直接感じながら曳き山車を見物する方向に変化していると言える。

祭礼時の住空間の使われ方の分析より、祭礼時には建具の操作や家具の移動がされていることがわかった。また、観賞空間の選定要因として、部屋の仕上げや日常的な用途が挙げられた。部屋の仕上げや日常的な用途により建具の操作や家具の移動のしやすさが異なる

ことが予想され、祭礼時の住空間の使い方が観賞空間の選定に影響していることが考察される。

5. 4 通り沿い住空間のあり方に影響する要因の考察へ

本研究では、建物内部の住空間との関係から、町家型市街地における町並み継承のあり方を考えるための基礎的な知見を得るべく、曳山祭開催時の町家の住空間の使われ方の実態、曳山を観賞する空間の特徴と、それらの変容を明らかにした。大正期以降は、曳山と住宅の高さの関係から、住宅内部から曳山を見やすい条件となった。この条件下では、住空間から曳山を見たいという要求が、住宅を通りに面して建て、大きな開口部を設けること、つまり通りと住空間との関係を密接にする方向に働くと考えられる。1980年時点では、住宅内部を観賞空間としている住宅が多いが、2019年時点では、通り側に駐車スペースやテラス・ベランダを設ける住宅が登場し、それらの新たな空間が観賞空間となるケースが多く確認された。屋外が観賞空間となると、住空間から祭礼行事を見物することが、町家における通りと住空間の密接な関係を継承することにつながりにくい。しかし、現時点では町並み継承につながりにくい観賞の方法がとられているとしても、祭礼行事を媒体として住空間と通りとが関わりを持ち続けているのであれば、将来、祭礼行事をきっかけとして町並みを継承することができる可能性が高いと言えるのではない。次稿では、観賞空間に対する住宅所有者の意識を中心に、通り沿い住空間のあり方に影響する要因を考察する。

謝辞

調査にあたり、対象地にお住まいの方々には多大なご協力をいただいた。特に新型コロナウイルス感染拡大下にも関わらず、快くアンケートの配布先を紹介してくださった自治会長のみなさま、アンケート調査・ヒアリング調査にご協力いただいたみなさまには、この場を借りて感謝の意を示したい。

参考文献

- 1) Fukuda, S. :Minkachousa-kara-machinamichousa-he (From Private House Survey to Townscape Survey),Kankyoubunka,Vol.50, pp.47-50, 1981.9(in Japanese)
福田晴彦: 民家調査から町並み調査へ, 環境文化, 第 50 号, pp.47-50, 1981.9
- 2)Saio, N. and Terao, Y. :A Study of Sustainability of Habitation in the Historical Preservation Areas, Comparative Analysis between Preservation Districts for Groups of Historic Buildings and Non-registered District, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol. 79, No. 695, 131-139, 2014.1(in Japanese)
斎尾直子,寺尾慈明: 歴史的町並みを活用したまちづくり実施地区における地域居住の維持 重要伝統的建造物群保存地区と未選定地区との比較分析, 日本建築学会計画系論文集, 第 79 巻, 695 号, pp.131-139,2014.1
- 3) Kamitani, T. et al.: Relation between Housing and Spatial Presentation in Otsu City, Relation between Housing Rehabilitation and Spatial Presentation in Urban Festivals, Part 2, Summaries of Technical Papers of Annual Meeting, Architectural Institute of Japan, F-1,Urban Planning, pp. 399-400, 2011.7(in Japanese)
神谷友代,三宅宏奈,石黒友紀乃,増井正哉: 大津市における建物更新としつらいの関係性について ー建物の更新と祭礼時の空間利用・演出の相互の関係性に関する研究 その2ー, 日本建築学会大会学術講演梗概集, F-1 都市計画, pp.399-400,2011.7
- 4) Narimatsu, M. and Katsura, H. :A study of festival space in the city: A report on the survey of YATSUSHIRO MYOKEN-FESTIVAL, HONDOSUWAJINJYA- FESTIVAL and AOIASOJINJYA OKUNCHI-

- FESTIVAL, Academic Reports at the Annual Meeting of Architectural Institute of Japan Kyushu Branch, Vol.51, pp. 437-440, 2012.3 (in Japanese)
成松正規,桂英昭: 都市における祭礼空間の研究-熊本県八代妙見祭、本渡諏訪神社大祭、青井阿蘇神社おくんち祭を事例として-, 日本建築学会九州支部研究報告,第 51 号,pp.437-440,2012.3
- 5) Matsuura, K. :Analysis of Urban Morphology on Festival Space Decorated on Street Space, In the Case of Japan's Three Biggest Float Festivals, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), Vol. 80 No. 712, 1339-1346, 2015.6(in Japanese)
松浦健治郎: 巡行型祝祭における街路空間と祝祭空間の都市形態学的解説 日本三大曳山祭を事例として, 日本建築学会計画系論文集, 第 80 巻, 第 712 号, pp.1339-1346, 2015.6
 - 6) Masui, M. et al.:An investigative research on spatial presentations at Machiya (traditional town houses) and their street during festival rites, Annual Report of Housing Research Foundation, No.25,pp.49-60,1998(in Japanese)
増井正哉,谷直樹,西岡陽子,新谷昭夫,岩間香,碓田智子,中嶋節子:町家および街路空間における祭礼時の空間演出に関する調査研究,住宅総合研究財団研究年報,Vol.25,pp.49-60,1998
 - 7)Shiotani, T. and Ohno, A. :Traditions and Changes on Dwelling Forms as Festivities in Rurban Area, In the Case of Hino-cho, Shiga Pre., Academic Reports at the Annual Meeting of Architectural Institute of Japan Kinki Branch, Vol.29, pp.389-392,1989.5(in Japanese)
塩谷壽翁,大野晶: 祝祭空間としての住居 ー「日野祭」の祭礼における住居空間の使われ方,日本建築学会近畿支部研究報告集,第 29 巻, pp.389-392,1989.5
 - 8)Kato, N. et al.: The Spatial Presentation of Historical Residential Area in the Urban Festival, A Case Study on Oumi Hino Town, Part I , Academic Reports at the Annual Meeting of Architectural Institute of Japan Kinki Branch, Vol.38, pp.553-556,1998.5(in Japanese)
加藤直子,新谷昭夫,永井淳子,碓田智子,古田恭子,中嶋節子,増井正哉,西岡陽子,谷直樹,岩間香: 祭礼時における伝統的居住地の空間演出 ー近江日野町における調査研究 その1ー, 日本建築学会近畿支部研究報告集,第 38 号, pp.553-556,1998.5
 - 9)Nagai, J. et al.: The Spatial Presentation of Traditional Houses in the Urban Festival, A Case Study on Oumi Hino Town, Part II, Academic Reports at the Annual Meeting of Architectural Institute of Japan Kinki Branch, Vol.38, pp. 557-560,1998.5(in Japanese)
永井淳子,新谷昭夫,加藤直子,碓田智子,古田恭子,中嶋節子,増井正哉,西岡陽子,谷直樹,岩間香: 祭礼時における伝統的住居の空間演出 ー近江日野町における調査研究 その2ー, 日本建築学会近畿支部研究報告集, 第 38 号, pp.557-560, 1998.5
 - 10)Mimura, T., Yamada, R. and Masui, M. : A Study on the Boundary Elements of Historical Residential Area, A Case Study on the Wooden Fencing and SAJIKI-MADO in Oumi Hino Town, Academic Reports at the Annual Meeting of Architectural Institute of Japan Kinki Branch, Vol.41, pp.553-556, 2001.5 (in Japanese)
三村友恵,山田梨江,増井正哉: 伝統的居住地における民家の境界要素に関する研究 ー近江日野町の板塀と棧敷窓ー, 日本建築学会近畿支部研究報告集,第 41 巻,pp.553-556, 2001.5
 - 11)Yamada, R., Mimura, T. and Masui, M.: A Study on the Boundary Elements of Historical Residential Area, Part 1, A Case Study on the Boarding Fence and SAJIKI-MADO in Oumi Hino Town, Summaries of Technical Papers of Annual Meeting, Architectural Institute of Japan,F-1,Urban Planning, pp.917-918,2001.7(in Japanese)
山田梨江,三村友恵,増井正哉: 伝統的居住地における民家の境界要素に関する研究 ーその1 ー近江日野町の板塀と棧敷窓ー, 日本建築学会大会学術講演梗概集,F-1 都市計画, pp.917-918,2001.7
 - 12)Mimura, T., Yamada, R. and Masui, M.: A Study on the Boundary Elements of Historical Residential Area, Part 2, The Origin of SAJIKI-MADO, Summaries of Technical Papers of Annual Meeting, Architectural Institute of Japan,F-1,Urban Planning, pp.919-920,2001.7(in Japanese)
三村友恵,山田梨江,増井正哉: 伝統的居住地における民家の境界要素に関する研究 ーその2 ー棧敷窓の起源ー, 日本建築学会大会学術講演梗概集,

- F-1 都市計画, pp.919-920,2001.7
- 13)Ebina, T. and Masui, M. : A Study on the Preservation of Townscape and Urban Festival, From the Survey of Hino Town and Its Traditional Urban Festival, Academic Reports at the Annual Meeting of Architectural Institute of Japan Kinki Branch, Vol.45, pp.369-372, 2005.5(in Japanese)
海老名貴子,増井正哉: 伝統的居住地における町並みの保存と祭礼のあり方に関する研究 ―近江日野町における調査研究―,日本建築学会近畿支部研究報告集,第 45 卷,pp.369-372,2005.5
- 14)Ebina, T., Tatsukawa, Y. and Masui, M.: A Study on the Preservation of Townscape and Urban Festival, From the Survey of Hino Town and Its Traditional Urban Festival(Part1), Academic Reports at the Annual Meeting of Architectural Institute of Japan Kinki Branch, Vol.46, pp.381-384,2006.5(in Japanese)
海老名貴子,立川結,増井正哉: 伝統的都市祭礼の空間演出を活かした町並み景観の保全整備に関する研究 ―滋賀県日野町を対象として その 1―,日本建築学会近畿支部研究報告集,第 46 卷, pp.381-384,2006.5
- 15)Tatsukawa, Y., Ebina, T., and Masui, M.: A Study on the Preservation of Townscape and Urban Festival, From the Survey of Hino Town and Its Traditional Urban Festival(Part2), Academic Reports at the Annual Meeting of Architectural Institute of Japan Kinki Branch, Vol.46, pp.385-388,2006.5(in Japanese)
立川結,海老名貴子,増井正哉: 伝統的都市祭礼の空間演出を活かした町並み景観の保全整備に関する研究 ―滋賀県日野町を対象として その 2―,日本建築学会近畿支部研究報告集, 第 46 卷,pp.385-388,2006.5
- 16)Komai, M. and Masui, M.: A Study of the Relation between Urban Spatial Structure and Presentation at Urban Festival, Case of Hino Town, Shiga Prefecture, Academic Reports at the Annual Meeting of Architectural Institute of Japan Kinki Branch, Vol.49, pp.497-500,2009.5(in Japanese)
駒井恵,増井正哉:町並み景観の変容と祭礼時における空間演出の変化の関係性に関する研究 ―滋賀県・日野町における事例から―,日本建築学会近畿支部研究報告集,第 49 号, pp.497-500,2009.5
- 17)Matsuzaki, R. et al.: A Study on the Relation of Residents' ideas over Special Use of Urban Festival and Renewal of buildings, From the Survey of Hino Town and Its Traditional Urban Festival, Part1, Summaries of Technical Papers of Annual Meeting, Architectural Institute of Japan, Urban Planning, pp.81-82,2013.7(in Japanese)
松崎良子,神谷友代,山本梨花,増井正哉: 都市祭礼に対する住民意識と建物更新の関わりに関する研究 ―滋賀県日野町を事例として (その 1)―,日本建築学会大会学術講演梗概集,都市計画,pp.81-82,2013.7
- 18)Kamitani, T. et al.: A Study on the Relation of Residents' ideas over Special Use of Urban Festival and Renewal of buildings, From the Survey of Hino Town and Its Traditional Urban Festival, Part2, Summaries of Technical Papers of Annual Meeting, Architectural Institute of Japan, Urban Planning, pp. 83-84,2013.7(in Japanese)
神谷友代,山本梨花,松崎良子,増井正哉: 都市祭礼に対する住民意識と建物更新の関わりに関する研究 ―滋賀県日野町を事例として (その 2)―,日本建築学会大会学術講演梗概集,都市計画, pp.83-84,2013.7
- 19)Yamamoto, R. et al.: A Study on the Relation of Residents' ideas over Special Use of Urban Festival and Renewal of buildings, From the Survey of Hino Town and Its Traditional Urban Festival, Part3, Summaries of Technical Papers of Annual Meeting, Architectural Institute of Japan, Urban Planning, pp. 85-86,2013.7(in Japanese)
山本梨花,神谷友代,松崎良子,増井正哉: 都市祭礼に対する住民意識と建物更新の関わりに関する研究 ―滋賀県日野町を事例として (その 3)―,日本建築学会大会学術講演梗概集,都市計画, pp.85-86,2013.7
- 20)Ishiguro, Y. and Masui, M.: Study on the Relation between the Replacement and the Spatial Utilization in the Urban Festival, A Case of Otsu-matsuri, Shiga Prefecture, Academic Reports at the Annual Meeting of Architectural Institute of Japan Kinki Branch, Vol.50, pp.545-548,2010.5(in Japanese)
石黒友紀乃,増井正哉: 建物の更新と祭礼時の空間利用・演出の変化に関する研究 ―滋賀県大津市を事例として―,日本建築学会近畿支部研究発表会, 第 50 卷, pp.545-548,2010.5
- 21)Miyake, H. et al.: Housing Rehabilitation and Transition of Presentation in Otsu City, Relation between Housing Rehabilitation and Spatial Presentation in Urban Festivals, Part 1, Summaries of Technical Papers of Annual Meeting, Architectural Institute of Japan, F-1,Urban Planning, pp. 397-398, 2011.7(in Japanese)
三宅宏奈,神谷友代,石黒友紀乃,増井正哉: 大津市における建物更新としつらの関係性について ―建物の更新と祭礼時の空間利用・演出の相互の関係性に関する研究― その 1 ―,日本建築学会大会学術講演梗概集, F-1 都市計画, pp.397-398,2011.7
- 22)Okabe, M. and Ariga, T. : A Study of Spatial Characteristics and Its Present Value of “FURUMAI” in Traditional Rituals, Case study of Lower Shrine Festival Events of “SHIKINEN-ZOUEI ONBASHIRA Festival of the Grand Shrine of Suwa”, Summaries of Technical Papers of Annual Meeting, Architectural Institute of Japan, E-2, Architectural Planning II, pp.145-146,2010.7(in Japanese)
岡部将己,有賀隆: 伝統的神事に見る「ふるまい」の空間的特性とその現代的意義に関する調査・研究 ―「諏訪大社式年造営御柱大祭」下社祭事を事例として―,日本建築学会大会学術講演梗概集,E-2 建築計画 II, pp.145-146,2010.7
- 23)Kawahara, S., Okamura, Y. and Toshi-shukusai-kenkyukai:Toshi-shukusai-kukanron-no-kokoromi(Attempt of Urban Festival Space Theory), Quarterly Machizukuri, Vol.36, pp.6-27,2012.10(in Japanese)
川原晋,岡村祐,都市祝祭空間研究会:都市祝祭空間論の試み,季刊まちづくり,第 36 卷,pp.6-27, 2012.10
- 24)Iwama, K. and Nishioka, Y. :Matsuri-no-Shitsurai, Machiya-to-Machinami(“Shitsurai” of Festivals, Townhouse and Townscape),Shibunkaku, 2008.2(in Japanese)
岩間香,西岡陽子: 祭りのしつらい 町家とまち並み,思文閣出版, 2008.2
- 25)Mikuni-cho Board of Education: Mikunicho-no-minka-to-machinami, Mikunicho-minka-chosa-Machinami-chosa-hokokusho (Townhouse and Townscape in Mikuni-cho, Survey Report of Private Houses and Townscape in Mikuni-cho), 1983 .4(in Japanese)
三国町教育委員会: 三国町の民家と町並 三国町民家調査・町並調査報告書, 三国町郷土資料館, 1983.4
- 26)Mikuni Museum Ryushokan: dai16kai-tokubetsuten, Mikuni-no-hikiyama-matsuri-ten (16 th Special Exhibition, Float Festival of Mikuni), 2000.3(in Japanese)
みくに龍翔館: 第 16 回特別展 三国の曳き山車まつり展, 三国町郷土資料館,2000.3
- 27)Tamai, T.: Kinsei-chihoutoshi-ni-okeru-machinami-no-keisei, Echizen-mikuniminato-no-machiya-to-toshikouzou (Townscape formation of Provincial City in Early Modern Period, Townhouse and Urban Structure of Echizen-mikuniminato, Kenchikushigaku, Vol.3, pp.60-92,1984.9(in Japanese)
玉井哲雄: 近世地方都市における町並みの形成 ―越前三国湊の町家と都市構造―, 建築史学, 第 3 卷, pp.60-92,1984.9
- 28)Mikami, K.:Me-de-miru-hukui-sakai-no-100nen (100 years of Fukui and Sakai), Kyodo-shuppansha,1993.10(in Japanese)
三上一夫: 目で見える福井・坂井の 100 年, 郷土出版社,1993.10
- 29)Uede, S.: Mikuniminato-oukei-mikunimatsuri-shokei (View of Mikuniminato and Mikunimatsuri), Fukui-shimbunsha,2009.5(in Japanese)
上出純宏: 三国湊奥景・三国祭頌景, 福井新聞社,2009.5

注

- 注 1)本研究では、町家型の敷地割りや、町家が建ち並ぶ当時の都市構造が現在に継承された市街地を「町家型市街地」と呼ぶこととする。
- 注 2)福田²⁾は、日本の木造町家に「ファサード」の概念を適用すること自体に疑問を唱え、その継承は町家の空間の本質的な継承にならないとの指摘をしている。斎尾ら²⁾は、伝建制度における町並み整備の方向性と地権者の価値観との食い違いが制度導入の障壁となっていることを指摘している。
- 注 3)建蔽地と非建蔽地を包括した住宅敷地内全体を指すこととする。
- 注 4)神谷ら³⁾の滋賀県大津市と大津祭を対象とした研究による。
- 注 5)町並みのあり方について論じる本研究では、当該年に当番となった住宅や祭礼の会場となる公民館のみを対象とするのではなく、祭礼ルートの沿道や、一定のエリア内全ての建物が対象とする必要がある。
- 注 6)通りと住空間との関係を論じる本研究では、祭礼時の建物への装飾では

- なく、建物内部の使われ方と使われる空間の在り方に着目して分析する必要がある。
- 注 7) 既往研究において、曳山を見るという行為が住空間のあり方に影響を与えている事例が多数報告されているためである。
- 注 8) 川原ら²⁹⁾によって定義された巡行型祝祭は神輿や曳山がまちなかを巡る祭礼行事を指す。その中でも特に地区内を限なく巡行する市街地周遊型の巡行ルートである祭礼は、地区内のより多くの住宅に影響を与えると考えられ、本研究の対象としてふさわしい。
- 注 9) 住空間に大きく影響を与える祭礼行事が調査対象として望ましいため、軒先への装飾にとどまらず、住空間から祭礼を見物する等、住空間を積極的に活用して祭礼行事を楽しむ習慣のあるものを対象とする。
- 注 10) 松浦³⁾は祭行事のうち巡行型行事の屋台曳行では、街路幅員が狭い場合は祭礼行事を見物する場が住宅敷地内や道路脇となり、街路幅員が中程度以上となると見物する場が街路となる傾向にあることを指摘しているため、巡行路の道路幅員が狭い方が祭礼行事が住空間に大きく影響を与える可能性が高いと考えられる。
- 注 11) 町並み継承の手法を検討するための知見を得るためには、住空間に対して強い規制がされていない地区を研究対象とすることが望ましい。
- 注 12) 岩間らの研究グループは祭礼行事と町家の関係性について多数研究を報告している。研究の視座が近い研究グループが選定した祭礼から対象とする祭礼を選定することが適していると考えた。
- 注 13) 北海道の江差姥神大神宮渡御祭、富山県の八尾曳山祭、富山県の城端曳山祭、石川県の美川おかえり祭、福井県の三国祭、三重県の上野天神祭、滋賀県の大津祭、大阪府の杭全神社夏祭、和歌山県の田辺祭が該当する。
- 注 14) アンケートの住宅の築年数の回答から、2019 年から 2020 年の間に住宅が建て替えられていないことを確認したため、2020 年に撮影した写真を 2019 年時点の住宅の状況を把握するために用いても問題ないと判断した。
- 注 15) 対象地における自治の最小単位である。その上位に複数の「区」から構成される「部」がある。神社に奉納する山車の台数は部ごとに決めており、部内の区が持ち回りで、当番となった年に山車を奉納する。
- 注 16) 対象地では「曳き山車」または「山車」と表記されることが多いためこの表記とする。
- 注 17) 三国祭の歴史については文献²⁶⁾と三国神社公式サイト (<http://www.mikunijinja.jp>) (最終閲覧日 2021/05/06) による。
- 注 18) 住宅様式の変遷については文献²⁷⁾による。
- 注 19) 分析の内容が文献²⁸⁾と文献²⁷⁾に詳述されている。
- 注 20) 文献²⁵⁾に記録されている。
- 注 21) 三国湊地区居住者より提供された 1905~1909 年に撮影された写真、同じく提供された 1935 年に撮影された写真、大正末期に撮影され文献²⁸⁾に掲載された写真、1960 年に撮影され福井新聞に掲載された写真、1999 年に撮影され文献²⁹⁾に掲載された写真、2008 年に撮影され文献²⁹⁾に掲載された写真、2014 年に東京大学都市デザイン研究室三国プロジェクトにより撮影された写真、2019 年に筆者が撮影した写真を分析した。
- 注 22) 三国祭開催時の写真は曳き山車を中心として撮影されたものが多く、その背景に写り込んだ沿道住宅の様子を分析した。2008 年以降の写真では、2 階の窓を開け放して見物している様子が確認できたが、それより前の写真では 2 階の窓に格子を設けている住宅が多く、内部の様子が確認できなかった。
- 注 23) 武者人形の足元と沿道の建物の軒先に写っている人の大きさを基準にすると、曳き山車と沿道の建物の高さの関係がわかりやすい。
- 注 24) 1 つの住宅が複数の観賞空間をもつ場合、当てはまる類型それぞれの件数にカウントしている。
- 注 25) ①・D) と ②・B) は同じ住宅 (1980 年時点) の 1 階と 2 階である。聞き取り調査の対象者は 1980 年時点では年齢が低かったため、観賞空間の選定の詳細な理由は把握していないということであった。
- 注 26) 類型化する際には間口方向の左右の差は考慮しておらず、左右どちらかに寄っている場合には右寄せの表記に統一している。

IMPACT OF THE FESTIVAL ON LIVING SPACE ALONG THE STREET
IN URBAN AREA CONSIST OF TOWNHOUSES (PART1):
FEATURES AND TRANSFORMATION OF LIVING SPACE USAGES DURING THE FESTIVAL
IN MIKUNI-MINATO DISTRICT, SAKAI CITY, FUKUI PREFECTURE

Minami MUNENO^{*1}, *Masayoshi NAGANO*^{*2}, *Naoto NAKAJIMA*^{*3}
and Shunsaku MIYAGI^{*4}

^{*1} Pacific Consultants Co., Ltd., M.Eng. (Former Grad. Stud., Graduate School of Engineering, Univ. of Tokyo)

^{*2} Assist. Prof., Graduate School of Engineering, Univ. of Tokyo, M.Eng.

^{*3} Assoc. Prof., Graduate School of Engineering, Univ. of Tokyo, Dr.Eng.

^{*4} Prof., Graduate School of Engineering, Univ. of Tokyo, Dr.Agr.

It has been reported that the inheritance of the historic architectural façade is not suitable for Japanese wooden townhouses and does not match the values of landowners. In an urban area consisting of townhouses, it is necessary to reexamine the method of inheriting the townscape from the relationship between the living space including the inside of the building and the townscape.

In this study, we focus on festivals held on the street, which is a typical medium that links living spaces and townscapes. Then, in order to obtain basic knowledge for examining the method of inheriting the townscape, we will target the townhouses in the Mikuni-minato district of Sakai City, Fukui Prefecture, and discuss the actual conditions of how the living space is used when the float festival is held, the characteristics of the space to watch the floats and their transformation. The two points in 1980 and 2019 will be compared.

The target area was developed from the Middle Ages to the early modern period. Especially after the latter half of the 17th century, Mikuni-minato became a prosperous port of call for Kitamaebune ships. The Mikuni Festival is an annual festival of Mikuni Shrine and is held every May. Floats, which are dedicated to the shrine by the residents of the area, slowly patrols the area. It is customary to prepare meals and sake at the houses along the street to entertain guests and to watch the floats from the living space.

We analyze the actual conditions and changes in how living spaces are used during festivals by a questionnaire survey of homeowners. At the time of the festival, the living space was more open to the street than in normal times due to the operation of fittings, and the open state became more prominent in 2019. At the same time, furniture were moved during the festival, and the arrangement was different from normal, and there was no significant change between the two time points. And, although more people are staying in the living space at the time of the festival at both points, the number of residents who stay at home tends to be smaller in 2019, and at both points, most of the houses have visitors. The hospitality has not changed, but the visitor type is unified and fixed in 2019.

A questionnaire survey of homeowners revealed that the watching space diversified from 1980 to 2019. A survey of the floor plans of the houses revealed 12 types of the positional relationship of streets, the entire main building, and the watching space. Furthermore, the factors for selecting the watching space were analyzed from the results of the interview survey with the homeowners and the survey results of the exterior photos of the houses. It was clarified that the selection of the watching space was influenced by the composition of the store space, the floor finish of the room, the daily use of the room, and the visibility to the street. The parking lots and terraces / balconies are the watching space only in 2019.

(2021 年 6 月 8 日原稿受理, 2021 年 10 月 4 日採用決定)